

牛乳・乳製品



◆飼養動向

2年2月時点の乳用牛飼養頭数、前年比1.0%増

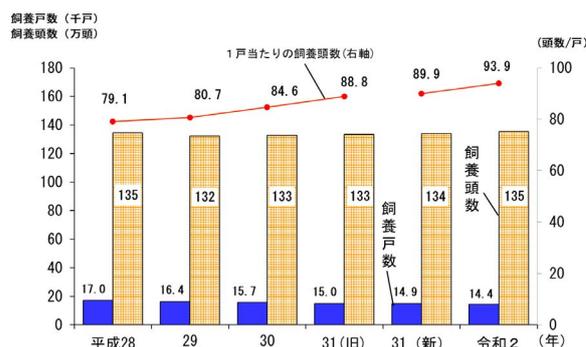
乳用牛の飼養戸数は、酪農家の高齢化や後継者不足などにより離農が進んでいることから、令和2年は、前年を500戸下回る1万4400戸（前年比3.4%減）
 （注1）とやや減少した。

こうした中で飼養頭数は、性判別精液の活用などによる後継牛確保の取り組みの進展などから、2年は135万2000頭（同1.0%増）と、前年をわずかに上回った。

この結果、同年の1戸当たり飼養頭数は、93.9頭（同4.4%増）となった（図1）。

（注1）：前年比（増減率）は、平成31年（新）と令和2年の数値を機構にて比較し、算出した。

図1 乳用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
 注1：各年2月1日現在。
 2：平成31年（旧）までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年（新）および令和2年は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。

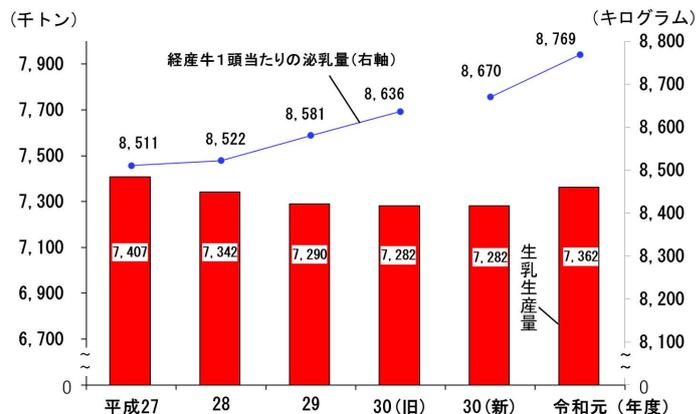
◆生乳生産量

元年度の生乳生産量、前年度比1.1%増

生乳生産量は、都府県での離農を背景に、平成8年度の約870万トンピークに、おおむね減少傾向で推移してきた。元年度の全国の生乳生産量は、飼養頭数や1戸当たりの泌乳量の増加などにより、736万2371トン（前年度比1.1%増）と4年振りに増加に転じ、前年度をわずかに上回った（図2）。経産牛1頭当たりの泌乳量は微増傾向で推移しており、元年度は8769キログラム（同1.1%増）
 （注2）となった。

（注2）：前年比（増減率）は、平成31年（新）と令和2年の数値を機構にて比較し、算出した。

図2 生乳生産量・経産牛1頭当たりの泌乳量の推移（全国）



資料：農林水産省「畜産統計」、「牛乳乳製品統計」
 注1：平成31年（旧）までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年（新）および令和2年は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。
 2：経産牛1頭当たりの泌乳量は、畜産統計および牛乳乳製品統計のデータを基に機構にて算出。

◆用途別生乳処理量

元年度の乳製品向け処理量、前年度比2.8%増

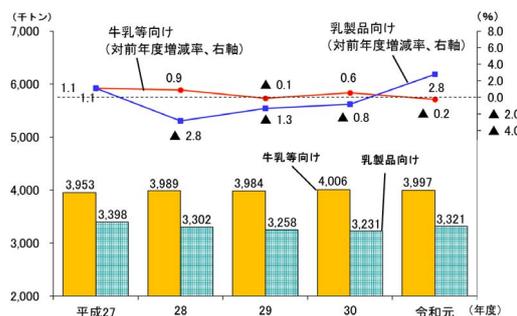
令和元年度の用途別生乳処理量を仕向け先別に見ると、牛乳等向けは399万7124トン（前年度比0.2%減）と前年度をわずかに下回った（図3）。このため、元年度の牛乳生産量に占める牛乳等向け処理量の割合を表す市乳化率は、54.3%と前年度より0.7ポイント低下した。

一方、乳製品向け処理量は332万768トン（同2.8%増）となった。こうしたことから、対前年度増減率でみると、7年度ぶりに乳製品向けが牛乳等向けを上回った。

このような前年度と異なる状況が見られた一因としては、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受け、生乳需給が一時的に緩和したことが挙げられる。

具体的には、令和2年3月2日に小中学校の臨時休校措置が全国的に実施され、学校給食用牛乳の需要が大きく減少した際には、余剰生乳の破棄を回避するため、長期保存可能な脱脂粉乳およびバターに仕向ける取り組みが行われた。

図3 用途別生乳処理量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

◆乳製品向け処理量

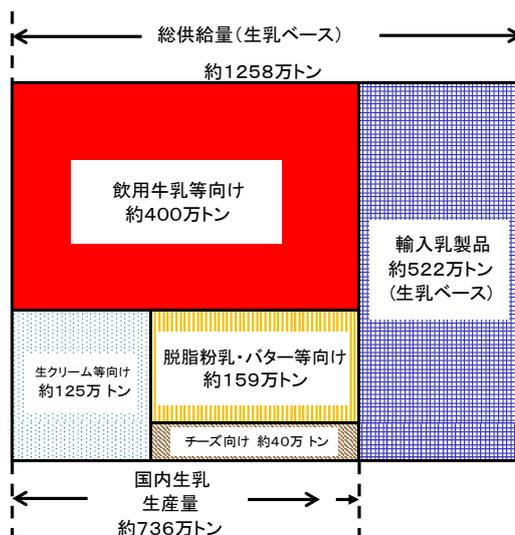
元年度の脱脂粉乳・バター等向け生乳処理量、7.4%増

令和元年度の生乳の需給構造を見ると、国産生乳生産は約736万トンと前年を上回った。このうち乳製品向け処理量を区分別に見ると、近年、減少傾向で推移していた脱脂粉乳・バター等向けは、上記の通りCOVID-19の影響などから約159万トン（前年度比7.4%増）と前年度をかなりの程度上回った（図4）。また、チーズ向けは前年度と変わらず約40万トン、生クリーム等向けは前年度から2万トン減少し、約125万トンとなった。

一方、輸入乳製品（生乳ベース）は約522万トンと増加傾向で推移している。

この結果、元年度の総供給量は約1258万トンと前年度から約13万トン増加した。

図4 生乳の需給構造の概要（令和元年度）



資料：農林水産省「畜産をめぐる情勢」

注1：四捨五入の関係で、必ずしも計が文中の数字と一致しない。

注2：国内生乳生産量の中には、このほか、他の用途向け（約8万トン）の生乳がある。

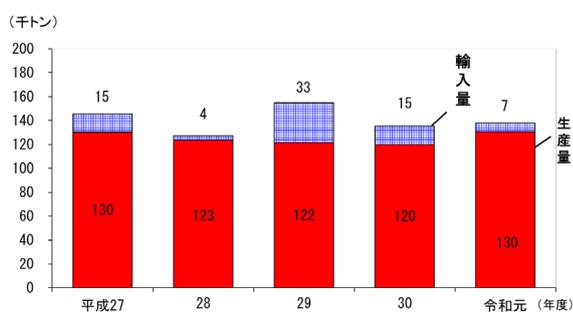
注3：生クリーム等向けは、生クリーム・脱脂濃縮乳・濃縮乳に仕向けられたものをいう。

◆脱脂粉乳

元年度の期末在庫量、前年度比16.3%増

脱脂粉乳の生産量は、平成28年から連続して減少傾向にあったが、令和元年度はCOVID-19の影響による増産もあり、13万497トン（前年度比8.7%増）と増加に転じた。一方で、同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、高い在庫水準の下で7473トン（同51.1%減）と大幅に減少した（図5）。

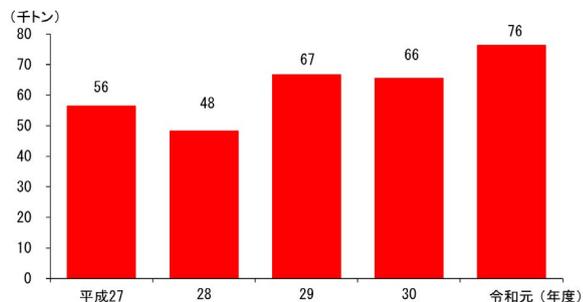
図5 脱脂粉乳の生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、(独)農畜産業振興機構調べ
注：輸入量は機構輸入分のみ。

こうした中、同年度の推定出回り量は、はっ酵乳需要の停滞などにより12万7876トン（同6.8%減）とかなりの程度減少したため、同年度の民間期末在庫量は、7万6270トン（同16.3%増）と大幅に増加した（図6）。

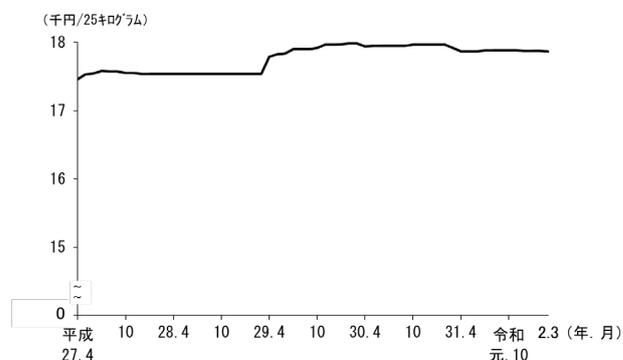
図6 脱脂粉乳の民間期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、(独)農畜産業振興機構調べ

脱脂粉乳の大口需要者価格は、平成26年度の消費増税や乳価の引き上げなどから上昇傾向となり、27年4月の乳価の引き上げなどから上昇したが、その後、おおむね横ばいで推移した。さらに、29年4月の乳価の引き上げ以降、30年度を通じて高い水準を維持したが、令和元年度は25キログラム当たり平均1万7873円（同0.4%安）とわずかに下落した（図7）。

図7 脱脂粉乳の大口需要者価格の推移



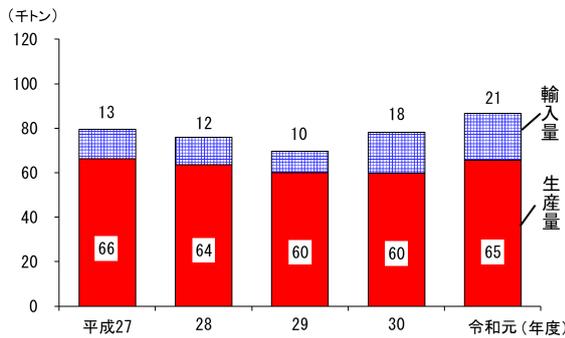
資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」
注：消費税を含む。

◆バター

元年度の期末在庫量、前年度比26.9%増

令和元年度のバターの生産量は、前述の通りCOVID-19の影響による増産もあり、6万5495トン（前年度比9.5%増）とか前年同月をかなりの程度上回った。また、同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、高い需要を背景に2万1265トン（同17.5%増）と大幅に増加した（図8）。

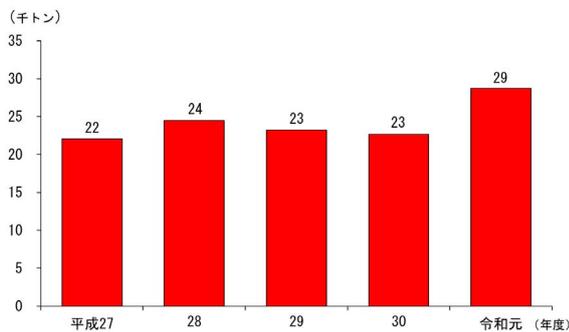
図8 バターの生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」
注：輸入量は機構輸入分のみ。

こうした中、同年度の推定出回り量は、8万1853トン（同5.1%増）とやや増加したが、上記の増産などの影響もあり、同年度の民間期末在庫量は2万750トン（同26.9%増）と大幅に増加した（図9）。

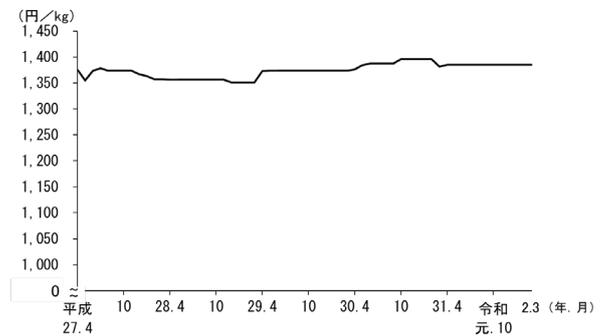
図9 バターの民間期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、（独）農畜産業振興機構調べ

バターの大口需要者価格は、脱脂粉乳と同様、平成26年度の消費増税や乳価の引き上げなどから上昇傾向となり、27年4月の乳価の引き上げなどから上昇し、その後、おおむね横ばいで推移した。さらに、29年4月の乳価の引き上げなどから30年度まで上昇傾向となったが、元年度は1キログラム当たり平均1385円（同0.3%安）とわずかに下落した（図10）。

図10 バターの大口需要者価格の推移



資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」
注：消費税を含む。

◆チーズ

元年度の総消費量、前年度比1.5%増

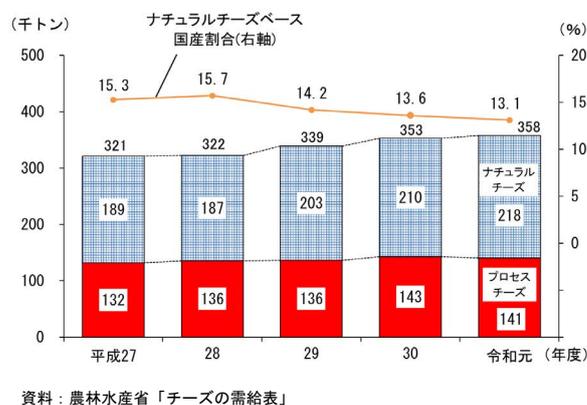
チーズの総消費量

チーズの総消費量は、家庭消費や外食需要の増加などを背景に、増加傾向で推移している。

令和元年度のナチュラルチーズ消費量は、国産ナチュラルチーズ生産量が減少したものの、輸入量が増加したことから、21万7718トン（前年度比3.5%増）とやや増加した。一方、前年まで増加傾向にあったプロセスチーズ消費量は、14万511トン（同1.5%減）とわずかに減少した。

この結果、ナチュラルチーズとプロセスチーズを合わせた総消費量は35万8229トン（同1.5%増）とわずかに増加した（図11）。

図11 チーズの総消費量と国産割合の推移

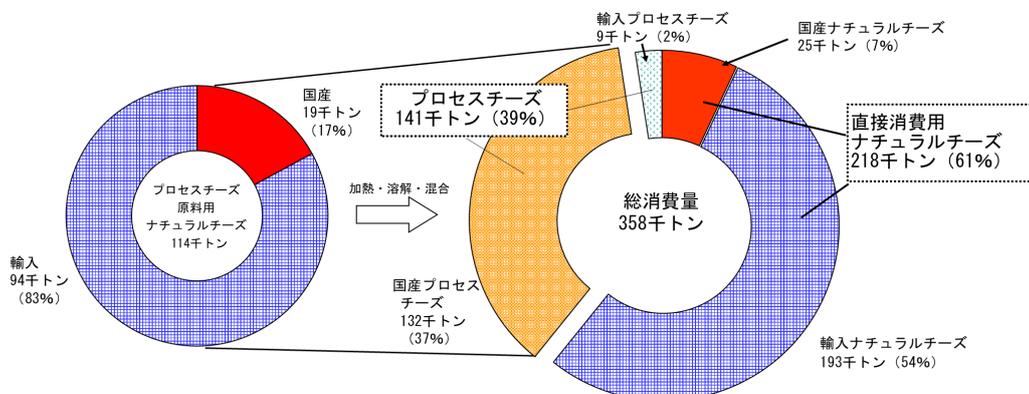


チーズ総消費量の内訳

令和元年度のチーズ総消費量に占める国産チーズの割合は、国内生産量が減少した一方、輸入が増加したことから13.1%（ナチュラルチーズベースに換算した場合の自給率）となり、前年度より0.5ポイント低下した。

うち、プロセスチーズ原料用以外のナチュラルチーズ（直接消費用ナチュラルチーズ）については、国産の伸びを輸入が上回ったため、国産の割合は11.5%と前年度より0.2ポイント低下した。また、プロセスチーズ原料用のナチュラルチーズに占める国産の割合も、17.1%と前年度より1.1ポイント低下した（図12）。

図12 令和元年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省「チーズの需給表」

注1：プロセスチーズ原料用以外とは、直接消費用、業務用、その他原料用として使用されたもの。

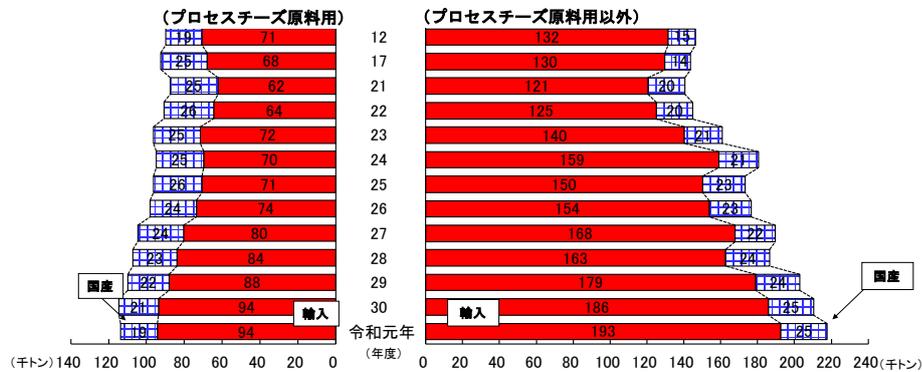
注2：四捨五入の関係で、必ずしも合計値が文中の数字と一致しない。

チーズの生産量・輸入量

令和元年度のナチュラルチーズの輸入量(プロセスチーズ原料用+プロセスチーズ原料用以外)は、28万6938トン(前年度比2.6%増)と増加した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用は9万4215トン(同0.4%増)、プロセスチーズ原料用以外は19万2723トン(同3.8%増)と、いずれもやや増加した(図13)。

国産ナチュラルチーズの生産量(プロセスチーズ原料用+プロセスチーズ原料用以外)は、平成30年度のチーズ向け生乳処理量の減少などから、4万4396トン(同2.2%減)とわずかに減少した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用が1万9401トン(同7.0%減)とかなりの程度減少した一方、プロセスチーズ原料用以外が2万4995トン(同1.9%増)とわずかに増加した。

図13 ナチュラルチーズの生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「チーズの需給表」
注：プロセスチーズ原料用以外とは、直接消費用、業務用、その他原料用として使用された量。

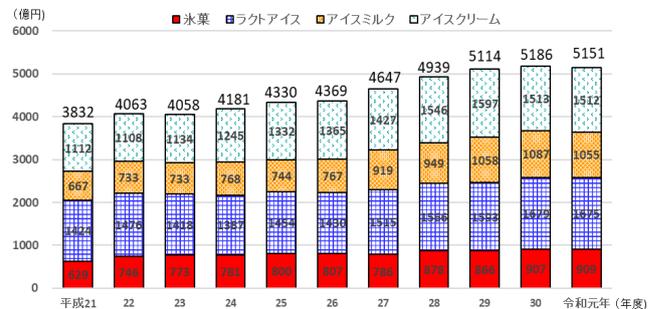
◆アイスクリーム

元年度の国産生産量、0.8%減

アイスクリームの市場規模は、平成30年度まで拡大傾向にあったが、令和元年度は梅雨明けの遅れやCOVID-19の影響などで業務用需要が減少したことで、前年度から0.7ポイント減少した(図14)。

需給動向を見ると、元年度の国産アイスクリーム生産量は、14万6125キロリットル(前年度比0.8%減)とわずかに減少した。一方、輸入量は、7866キロリットル(同11.0%減)とかなり大きく減少した。

図14 種類別アイスクリームの市場規模の推移



資料：一般社団法人 日本アイスクリーム協会
「2019年度 アイスクリーム類及び氷菓 販売実績」
農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」
※輸入量は、1トン=1.455キロリットルで換算